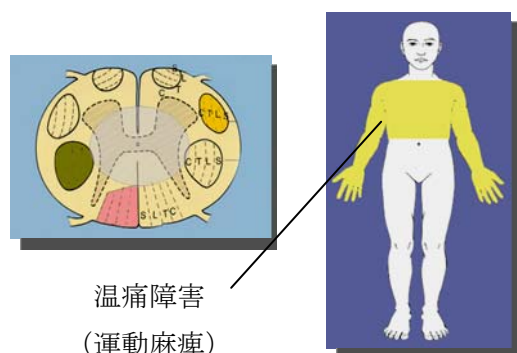


脊髄中心症候群



もう1つは脊髄の中に障害がでてきた場合、これはキアリ奇形とか脊髄腫瘍とか脊髄のなかにできると、触覚とか運動覚は大丈夫なんです。ところが、この交叉する線維の温痛覚だけがやられるので、手は全く正常に働くことが出来るし、触っている感じはあるので本人ははじめ異常に気づかないんです。ところが、お風呂に手を入れても温かさがわからない。お風呂に手を入れてみて、ちょうどいいかなと思って脚を入れてみたら、ものすごく熱くてやけどをしたとか、あるいはお料理をしても、痛さがわからないので包丁で手を切ってもわからない、あるいはやけどをしてもわからないということになります。これが、温痛覚だけの障害なので、触覚と温痛覚が解離しているという意味で、解離性知覚障害といいます。こんな形がでてくるのが、脊髄中心症候群です。

勿論それぞれのメカニズムを覚えられる必要はないのですが、脊髄の線維がどこを走っているか、大まかな場所を知ることによって、その症状をみると、どういうメカニズムで脊髄が傷んできたかというのを想像することができるということです。